

【Ⅲ】 衣と紙に関わる木と草と

いつの時代も衣・食・住は、人間にとって最大の関心事である。古い時代はまず食と住が、そして食・住が充足してくると衣への関心が高まり、ことに『衣』に関しては他のどんな動物をもってしても人間には及ばない。言ってみればこれはアダムとイブの時代から綿々と続いている、人間のみを与えられた特権であり、同時に人間だけに課せられた義務であり、人間だけに許されたお洒落でもある。だから衣は、デザインという領域にまで裾野をひろげた文化として成立し、そのことは今も昔も少しも変わっていない。だからこそ清少納言は『枕草子』の中で、女性の立場から襲(カサネ)の色目や着物について、多大なページを割き、紫式部の王朝絵巻である『源氏物語』も衣について、さまざまな場面で詳細に記述しているのである。

さて衣に関わる植物は、第一のグループとして、麻や綿布のように植物の繊維や果実そのものを利用して織布とするもの。第二のグループとして、桑や牧草のように蚕や羊の餌となって、間接的に衣に関わるものの二つに大別できよう。

また織布は染色技術の発展とともに、飛鳥から奈良時代には、冠位十二階の制度や、八色の姓に見られるように、しばしば地位や官位などを表わすようになったことも、忘れることはできないだろう。当然のことながら絹は、地位の高いものの衣であったし、藤布などは誰でも手に入れることのできるものであった。そして衣を作る植物の繊維はまた梶や楮のように紙を作る原料になることが多かった。

ここでは衣の中でも特に『栲』の様な原始的な繊維に始まって、『麻』『綿』といった身近な天然繊維の材料となった植物について、さらには桑などのように間接的に繊維にかかわる植物について、人間との歴史的関わりを交えながら、考察してゆきたい。そこには古来より日本人と密接に関わってきた、衣の歴史が潜んでいるばかりか、古代人がいかにして着る物を調達し、それをファッションにまで高めていったかを探る、一つのヒントが隠されているのである。

※紙布＝紙も布も素材は植物の繊維が用いられたから、両者に差異はなかった。平安末期ごろ紙の生産が増してくると、これで布地を作ることが考案された。経糸も緯糸も紙を用いた布地のことを『紙布』と言い、これで『紙衣』(カミゴロモ)が作られるようになった。江戸時代になると、経糸に絹や綿、麻などを用い、緯糸に紙糸を用いるものも現れ、それぞれ絹紙布、綿紙布、麻紙布といった。紙の素材も改良されカジの繊維などが用いられるようになった。紙をそのまま使用した紙衣と異なって軽く、しかも肌触りが良かったために、主に女性の夏の衣料として使用された。



古代エジプトで紙の原料として用いられたパピルス、茎の断面は三角形である。紙を作る植物と布をとる植物は共通していることが多い(東京都小平市薬用植物園)。

[この項に記されている植物のリスト](#)

【Ⅲ】 衣と紙に関わる木と草と 04-03-00-1

- | | |
|-----------------|------------|
| 1) カジ=梶/栲/楮/構/殻 | 04-03-01-1 |
| 2) コウゾ=楮 | 04-03-02-1 |
| 3) ワタ=綿 | 04-03-03-1 |
| 4) クワ=桑 | 04-03-04-1 |
| 5) アサとカラムシ=麻と苧 | 04-03-05-1 |
| 6) トロロアオイとオクラ | 04-03-06-1 |

[目次に戻る](#)